

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第23号

平成28年3月15日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

五代の天皇に仕え、波瀾万丈の生涯を送った楠正儀

死んで名を残した正行。生き抜き名を残せなかった正儀

正儀はどのような人物だったのか

正行の末弟、楠正儀とはどのような人物だったのでしょう。

今月は、井之元春義著「楠木氏三代」をベースに、扇谷が作成した「楠正儀関係年表」を使って、正儀の生きざま、そして正成・正行との生き方の違いを学びました。

以下に、正儀に関係する部分のみを掲載します。

【楠正儀年表】

四條畷の合戦後、正儀、東条を死守

◆1348 正平3年

四條畷の合戦後、楠家棟梁を継いだ正儀、河内・和泉・摂津三カ国の国主に。この時、19歳か

1月、正儀、高師泰と河内国石川瓦で対陣（楠木氏三代）
～ 戦は、1月14日から2月8日まで続く

～ 楠の兵の多くが東条に残ったことが分かる ～

◆1349 正平4年

1月、正儀、河内国六万寺往生院に詣でる（楠木氏三代）
8/29、正儀は国宣を發し、小高瀬庄の領家職を觀心寺に安堵する論旨を、橋本正茂に施行せしめる

◆1351 正平6年

2/10、正儀の命を受け、和田助氏、河内国大饗城を攻める（楠木氏三代）

7/25、和田助氏ら、正儀に従い和泉国陶器城を攻める（楠木氏三代）

～ この頃、正儀、南朝軍の立て直しに動く ～

◆1352 正平7年

正儀、北畠顕能とともに、先鋒として京に向かう
→ 正平の一統は破れる

男山八幡の戦いにおいて、正儀への批判高まる

太平記巻3

「楠は父にも似ず兄にも替はりて、心少し延びたる者なりければ、今日よ明日よといふばかりにて、・・・」

◆1353 正平8年

6月、正儀、山名時氏らと京に攻め上がる。

7月、正儀、京都争奪戦で敗れ、河内に戻る

◆1354 正平9年

12月、正儀、南朝に下った足利直冬とともに入京

◆1355 正平10年

京は奪い返され、直冬は西国に退く

◆1357 正平12年

正儀、左馬頭に任ぜられる

◆1358 正平13年

正儀、和田正武、金剛寺の行宮に参内し、

「天の時、地の利、人の和」を得て、南朝必勝と奏上

正儀、帝に対し觀心寺への動座を奏上

正儀みずからは、千早に立てこもる、と

◆1360 正平15年

5月、正儀、赤坂城を捨て、金剛山に退く。

この時、積極策の和田正武と確執生まれる

要は、負け戦に手を出さない正儀

正儀の京都奪回無益論 太平記巻34

「朝敵都を落つる事五箇度に及び候。然れども天下の士卒、なほ皇天を戴く者少なく候ふあひだ、官軍洛中に足をとどむる事を得ず候」～現実を見つめた

◆1366 正平21年

正儀、佐々木道誉と和睦交渉

◆1367 正平22年

和睦論者、正儀は長慶天皇と対立

◆1368 正平23年

和睦論者の正儀、苦境に追いやられていく

正平24年、正儀、北朝に降る

◆1369 正平24年

正儀、管領細川頼之の周旋で北朝に投降

- 理由① 南朝内部における主戦論と和睦論の対立
- 理由② 主戦論の長慶天皇の即位
- 理由③ 正儀を信任した後村上天皇の崩御
- 理由④ 正儀が、幕府管領の細川頼之に誼を通じたこと
- 理由⑤ 楠一族内部における路線対立
- 理由⑥ 正儀の性格と軍略

吉野の宮の主戦派の長慶天皇、四
条隆俊公が優勢で、和睦派の正儀
は劣勢に。
細川頼之、正儀を利用して南北両
朝の和睦に強い意欲。
正儀は実践派の武将ではなく、机
上で作戦を練る参謀肌であった。
そして何よりも、南北朝の統一へ
のあくなき執念が！

- 3月、正儀、南軍に攻められ、天王寺に退く
12月、管領細川頼之、和睦交渉を推進するが南朝方の反対でとん挫
- ◆1370 建徳元年
11月、正儀、南朝方の和田正武に攻められる
- ◆1371 建徳2年
5月、正儀、南朝方の攻撃を受ける
- ◆1373 文中2年
8月、正儀、北軍を導いて天野山金剛寺行宮を攻める
～北軍の河内の国天野山金剛寺攻略戦
この頃、南朝方から北朝方に降伏する者、続出
- ◆1380 天授6年
細川頼之の失脚後、正儀、北朝内で孤立

十数年後、正儀、再び南朝に復す

- ◆1382 弘和2年
正儀、再び南朝に帰参「山刀屋文書」
- 理由① 将軍義満による正儀の和泉の国の守護職剥奪
- 理由② 頼之の失脚で、正儀、北朝で四面楚歌の孤立状態に
- 理由③ 長慶天皇の後龜山天皇への譲位、四条隆俊の戦死等、南朝内における和平派優位の状況
- 理由④ 南朝衰退が決定的となり、その南朝への熱い思い～父正成、兄正行と同様、流れる血脈と純な

る思念

- ◆1383 弘和3年
正儀の発した国宣に、参議とある
- ◆1385 元中2年
正儀、河内長野二王山にて北軍と対戦
8月、正儀、紀伊の国三谷城で挙兵するも、敗北
- ◆1386 元中3年
4月、正儀、淡輪因幡左衛門尉長重に知行安堵
～ 正儀の活躍を証明する最後の史料 ～

正儀の最期は、果たしていつ、どこで

- ◆1387 元中4年～1389 元中6年
この頃、正儀の死？

1348年四條畷の合戦から、史料の
残る1386年までの約40年間
南北両朝にわたり重鎮として先陣
の指揮を執り、後村上・長慶・後龜
山・後光源・後円融の5人の帝に歴
任し、南北朝和解に尽力し、波瀾万
丈の生涯を送る。

- ◆1390 元中7年
4月4日付、伊豫守、宮内少輔から楠木右馬頭（正勝、正儀の長男）にあてた二見文書が残ることから、この時点ですでに正儀はこの世にいないものと判断できる
- ◆1392 元中9年
明德の乱において、正儀の遺子、正勝・正元千早に立てこもるが陥落

血脈と純な思念が故、波乱の人生

- 約40年にわたって、南北両朝、後村上・長慶・後龜山・後光源・後円融の五代の天皇に仕え、波乱万丈ともいえる生涯を送った正儀。
- 南朝のため、そして南朝復権という義のため、真っ直ぐに生き、潔く散り、後世に長く名を残した正成と正行。その一方、南朝復権のためとはいえ、北朝に降ってまで生き抜いたことで、後世に疎んじられた正儀。
- しかし、この親子・兄弟に流れていたのは、南朝への熱い思い一筋に流れる血脈と純な思念そのものであった。死ぬことで名を残した正行。
生き抜いたことで名を残せなかった正儀。
楠一族に悲哀を思わざるを得ない。
- (文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭
(追伸) 毎月第3火曜日、午後1時30分から例会を開いています。楠正行に関心のある方、気軽に覗いてください。